２．同和問題の現状

このような多くの課題に対応せざるを得なくなった教育現場の人権状況，あるいは人権課題の拡散化は,従来人権教育の中心であった同和教育の存在価値を希薄化させかねない。よってまず部落の現実から見てみよう。

①部落の子どもたちの生活格差は依然として解決されていない。しかし，社会全体の経済水準がどんどんずり落ちているため，今や部落の子どもたちも，多くの困難を抱える子どもたちの一部となっている。

②しかし，部落の子どもたちが抱える問題は，単に貧困一般だけではなく，社会的偏見の対象にされることから，自らの存在を肯定的に評価できず，自尊感情を健全に保てないことである。そしてそれは，その後の生活困難の原因となっていくのである。

③さらに新たにもたらされた脅威が，インターネット上の差別書き込みと，ヘイトスピーチの問題である。大人世代と違って際だった貧困がない現代の部落の子どもたちに，今，自分の住所や氏名がネット上で映像入りで暴露されるという危機が押し寄せている。個人を特定できないようにしてきた差別解消の努力は水の泡になった。教育現場では，こんなことを書いている人がいるんだということをしっかり恐れずに伝えていくべきだと考える。

④このような現状から，学校は「肯定的自己認識の獲得」と「進路保障」を車の両輪とする同和教育の成果を引き継いでいく必要がある。いい会社に就職するというだけではなく，結婚差別などの問題や被差別部落出身であることを肯定できない意識と闘って勝つという，肯定的自己認識を獲得させることが大切である。この２つの重要性は，全ての子どもにあてはまることでもある。

３．今後の展望

以上の現状分析から，同和教育を放棄していいというわけにはいかず，さりとて同和教育だけでいいという理屈も成り立たず，多様な困難を抱えている子どもたちに対応しなくてはならない教育現場は，きわめて厳しい状況に置かれているという実態が浮き彫りになる。我々は，そういう厳しい時代を生きているという覚悟を固めるべきだろう。

当面我々がとりうることは，長年培ってきた「同和教育的手法」をすべての人権課題にあてはめ，「自尊感情の獲得」と「進路保障」，この二つを，すべての支援を必要とする子どもたちに保障していくことである。

なお，「同和教育的手法」とは，具体的には「対面的で継続的であること」と「チームで対応すること」である。つまり，教師と子どもの間に，学齢期で終わらず，成人になってもその関係を維持していける，１対１の信頼関係を作ること。そして，個別具体的な問題があれば，その内容に応じたチーム（人権教育担当者や担任だけでなく，関係教員や保護者を巻き込む）を作って支援することである。

４．野田市立南部中学校の取組（野田市人権教育研究指定校）

～南部中学校の学校人権教育　研究の概要～

１　学校教育目標

「知性と活力に満ちた南中生の育成　～愛情・協働・自立・貢献～」

○意欲的に学ぶ生徒　　○仲間を大切にする生徒　　○健康増進を図る生徒

２　研究主題

「自他を尊重しあえる生徒の育成」

～Ｑ－Ｕテスト・道徳・補習を通しての，個を生かす指導の在り方～

３　主題設定の理由

（１）学校教育目標から

本校は平成24年度から野田市教育委員会の指定により「学校人権教育」の研究校として研究を進めてきている。

本校の学校教育目標は，「知性と活力に満ちた南中生の育成」としており，目指す生徒像として，「意欲的に学ぶ生徒」「仲間を大切にする生徒」「健康増進を図る生徒」を掲げている。その教育目標のもと，学校人権教育を実践していくには，それぞれの目指す生徒像について次のように考えていく。「意欲的に学ぶ生徒」に対しては，各教科の授業において，「個の支援」を充実させるとともに，学校全体で基礎学力の定着を目指していく。そのために，「個」の存在が学級の中でどのような位置づけになっているのかを，日々の観察の視点だけでなく，Ｑ－Ｕテストを活用した客観的な視点から学級集団と個の関係を分析し，各教科の授業に生かしていけるようにしていく。また，学校の授業で満足できない生徒に対しても「個の支援」を行い，意欲の継続にも努める。そして「個の支援」だけでなく，他との関わりの中で自分の学力を高めさせていく。次に，「仲間を大切にする生徒」に対しては，前述の通りＱ－Ｕテストの分析から日々の学級経営及び教科経営に個の支援を生かしていくとともに，毎週１時間の道徳の授業を今まで以上に大切にして，豊かな心を育み，自分も含め仲間を大切にしたり，他との関わりについて深く考えさせることで豊かな人格形成を進めていく。最後に，「健康増進を図る生徒」に対しては，前述の通り，道徳の授業において自己の生活や存在について考えさせることと併せ，日々の活動と関連づけながら学校活動の全領域において進めていく。

（２）生徒の実態から

本校の生徒は明るく活発であり，日々の授業や学校生活に真面目に取り組む生徒が多い。また，学校行事では，学級や学年の一体感を大切にし，お互いを気づかい合ってとても素晴らしい行事をつくりあげてきている。

学力の面では，全体的に学習には落ち着いて取り組んできてはいるが，学力差が大きくなってしまっているのが現状である。特に，学力低位の生徒が学習への意欲を失い，無気力になる時期が早く，３年生の時点で進路意識を高く持

への意欲を失い，無気力になる時期が早く，３年生の時点で進路意識を高く持てない生徒も比較的多くなっている。そのような学習面の実態から，平成24年度から６校時のあとに「南中タイム」という時間を位置づけ，毎週，定期的に「補習」の時間を組み込んできた。昨年度は，新たな試みであったので，方向性がはっきりしないところもあった。しかし，本年度は各学年・各教科とも「個の支援」というはっきりとした目的を持って毎週の「補習」の時間を計画的に行ってきた。また，学習に対する支援を厚くしていくことで意欲を失う生徒を大幅に減らしていきたいと考えている。当然，各教科の授業の中でも「個の支援」を充実させ，個別指導を今まで以上に手厚く行っていく。また，学力低位の生徒に対してだけでなく，上位の生徒に対しても，日常の授業では深く扱わない教材や，発展的な内容を「補習」の時間を中心に行っていくことで，さらなる学習への意欲を喚起していくこともねらっていく。

学校生活の面では，全体的に落ち着いた生活を送ってきてはいるが，リーダーの育成が大きな課題となっている。同時に，リーダーを支えて活動したり，日々の学校生活をより良いものにしていこうという気持ちを持っている生徒が少ないと思われる。一部に，自己中心的な考えを持って行動する生徒も見られ，一体感のある，温かみのある学校生活の障害となっているのが現状である。そのため，昨年度は道徳の授業研究を行い，生徒の心情をより効果的に耕し，自他を尊重する気持ちを養うことをねらってきた。道徳の授業の中でも，中心発問での話し合い活動やワークシートに記述する言語活動を重視し，自分の気持ちを書き表したり，相手の話をじっくり聞いて，その考えに対して自分の考えを照らし合わせたりすることを多く取り入れてきた。今年度は，道徳の授業と他の教科や特別活動との関連を洗い出し，今まで以上に意図的に全領域での道徳性を養うということを意識して取り組んでいく。さらに，Ｑ－Ｕテストで学級の実態や個の存在を分析し，客観的な視点からも生徒の実態を見ることで，意図的な道徳の授業を実践し，自他を大切にする心情をより深め，他との関わりを大切にする生徒を育成することを目指していく。

（３）今日的な課題から

現在の学校を取り巻く環境には大きな課題が山積している。「いじめ」「不登校」「体罰」等，あげきれないほどである。中でも「いじめ」の問題は未だ根が深く，解消していくことも困難である。その「いじめ」の根底にあるのは，「自尊心を持つこと」「他人を思いやり，尊重すること」という感情が希薄になっていることが大きな要因の一つであると思われる。そこで，今回このような主題を設定した。学力を主とした自分の力を伸ばし，自信をつけさせることにより自尊心を向上させていく。また，集団の中での自分の存在価値というものにもしっかりと気づかせ，「個を尊重」した集団づくりをしていくことで自分を大切にする気持ち，さらには，周りの人に対する感謝の気持ちを持たせていく。一方，各教科や道徳の授業を通して，他人の意見を尊重する態度を養い，自分と違う考え方も認めていこうという豊かな心情にも気づかせながら，他を尊重する心情を養っていくことを目指していきたい。

（４）学校人権教育の視点から

文部科学省の審議会である人権教育の指導方法等に関する調査研究会によって出された「人権教育の指導方法等の在り方について」において，人権教育の目標は，以下の通りに示された。（第一次とりまとめ）

> 人権教育の目標
>
> 一人一人の児童生徒がその発達段階に応じ，人権の意義・内容や重要性について理解し,「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになり，それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に表れるとともに，人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにする。

「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになるためには，まず，自分が大切にされていて，学校に居場所をしっかりと持っていることが重要になる。自分を大切にする心が育てば，おのずと他の人も大切にし，その人の存在を認める気持ちを持つことができるようになると考える。そこで，本校では，「個の支援」に焦点を当て，学習における支援，学級集団の中での支援という実践していくことにした。特に，「学級集団の中での支援」においては，各教科や道徳の授業を通して言語活動に力点を置き，他の人の立場になって考えることや他の人の気持ちを想像する力を養うとともに，自分の考えや気持ちを適切に表現して伝え合う力を身に付けさせ，その技能を伸ばしたい。また，話し合いの場においては，自他の要求や考え方を尊重し，ともに要求を満たせるような解決方法を見出す力を身に付けさせていきたいと考える。この技能を身に付けさせるためには，主体的に学ぼうとする意欲を持たせることが重要になってくる。そこで，もう一方の「個の支援」として，基礎学力を身に付けさせ，学習意欲を継続させることを目指して「補習」を計画的に行っていく。

具体的な研究の方法としては，日常の学校活動と大きく変わらないが，まずは教職員の人権感覚を向上させるとともに，人権教育の視点を効果的に日々の実践の中に組み込んでいくことが大切である。生徒の発達段階に応じた「個の支援」を適切に行い，自他を大切にする人間関係づくりを目指すとともに，人権が尊重される学校社会をつくっていきたい。

４　研究目標

「集団とのかかわりの中で，学級・学年における個の存在感を味わわせる」

「心豊かに，学力の向上をめざして」

５　研究仮説

「Ｑ－Ｕテストの分析から集団の中での『個の支援』を充実させれば，学級や学校での個の存在感を味わうことができ，知性と活力に満ちた学校生活が送れるだろう。」

（１）「個の存在感」とは…

本校における「個の存在感」とは，集団の中で自己を肯定する場面があり，自ら進んで活動しようとする意欲を持てる場面が各個人にそれぞれ備わっているということである。

具体的には，Ｑ－Ｕテストの分析から，「学校不満足群」にプロットされる生徒においては，「個の存在感」を集団の中で感じ取れていないと推察する。また学習面においても，授業やテストの結果から，学力に対して自己肯定感を持てずにいる生徒が多く存在することもわかる。

それらの生徒に，集団の中での活躍の場，自己肯定ができる場，自己の存在を確認できる場を与えていくことで，「個の存在感」を味わわせ，知性と活力にに満ちた意欲的な学習や活動をさせていくことである。

（２）「知性と活力に満ちた学校生活」とは…

知性には言うまでもなく学力が根底にある。学力が追いついてこなければ，授業における自己肯定の場は保障されない。つまり，「知性に満ちる」とは，学力の底上げを十分に図り，授業をはじめとする学習場面での自己肯定ができる場を設定できるよう基礎学力を身に付けさせ，意欲的に学習活動に取り組むことである。その反面，学力が十分な生徒にとっても発展的な課題に取り組ませる場面を設定し，学習意欲を満足させることで「知性」を高めることを目指す。さらに，最終的には「進路」の保障につながっていくものである。

活力とは集団の持つ活気であり，言い換えれば，集団の秩序を保ちつつ，個個が自分の活躍の場を見つけ，意欲を持って活動することである。自己の存在を確認できなければ，意欲的に活動することはできない。「個の存在感」を十分に感じ取らせることで，自分の存在を認め，「活力に満ちた」学校生活を送ることができると考える。

（３）「個の支援」とは…

本校における個の支援の柱は３つある。

①各教科の授業の中で，自分の意見を持たせたり，他の意見を認めたりする場面を持つ。その中で，「個」を孤立させることなく，集団の中に自分の存在を認めさせる。

②道徳の授業において，自己の価値観を振り返らせ，自他を尊重する道徳的実践力を身に付けさせる。

③教科の授業ではもとより，南中タイムでの「補習」を計画的に行い，基礎学力の底上げを図る。

①の各教科の授業では，自分の考えや意見をしっかり持たせることにより自分の存在を認めるとともに，話し合い活動やグループ活動を通して，他者の意見を受け入れて考えさせる場面を意図的につくる。その手立てとして，「相互評価」を授業の中で取り入れ実践していくこととする。話し合いや学び合いの中で，自他の考え方の違いや他者の思いを受け入れることで集団の中での自己の存在感を持たせ，なおかつお互いの意見を授業の中で尊重しあえる教科指導を目指し，その

観点で「相互評価」を取り入れお互いを尊重しあえる学習環境づくりに生かしていく。

②の道徳の授業では，じっくりと自分の価値観と向き合うことで，自己肯定の場面を設ける。さらには，他者との価値観の比較を通して，自他を尊重できるような心情を養い，自分の道徳的価値観を向上させる。道徳の授業にも「相互評価」を取り入れ，自他の価値観の違いやその摺り合わせをすることで，人権の目標により近づけていきたい。そして，授業のみならずその他の活動の場面で，集団の中での自己の存在を認めるような道徳的実践力を身に付けさせていく。

③の補習では，学習面に不安があり，教科の授業でも自己肯定が困難な生徒に計画的・効果的に補習を行い，日常の授業の中でも意欲を高めることができるように仕組んでいきたい。そして，全生徒への基礎学力の定着の上に，十分な学力を身に付けさせて，進路の保障をしていきたい。その反面，学力をさらに高めたい生徒に対しては，さらに発展的な内容の補習を行い，学習意欲の向上を目指すとともに，自己の力を存分に発揮する場面を設定していく。ここでも「相互評価」を取り入れ，誰しもががんばって学習に取り組んでいることを感じ取らせ，集団としての学習意欲の向上を目指す。

６　研究の具体的内容

（１）全校における「Ｑ－Ｕテスト」を実施し，各学級の分析を行い，「学校不満足群」に入る生徒への「個の支援」を検討し，実践する。

（２）道徳の授業を通して個人の価値観を共有させ，学級集団の中での個の存在感を肯定できるように支援する。また，「相互評価」を効果的に取り入れ，自他の価値観を尊重しあえる授業づくりを実践する。

（３）「南中タイム」における「補習」を計画的に実施し，学習面における個別指導を充実させる。さらに，学び合いや「相互評価」をする場面を取り入れ，自分だけでなく，みんなで向上していこうとする集団づくりを目指す。

（４）各教科の授業において，個の支援を充実させ，自己肯定感や自己存在感を高めさせるとともに，「相互評価」を取り入れ，自他を尊重しあえる生徒を育成する。